

なぜナルン市民は立ち上がったのか ～革命 勃発の端緒と文脈に関する一考察～

大倉， 忠人

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of
graduate studies

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

193

(終了ページ / End Page)

208

(発行年 / Year)

2013-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009973>

なぜナルン市民は立ち上がったのか ～革命勃発の端緒と文脈に関する一考察～¹

政策科学研究科 政策科学専攻

博士後期課程3年 大 倉 忠 人

<目次>

1. はじめに
 - 1-1. 問題意識
 - 1-2. 報告の意義
 - 1-3. 検証方法
2. 二つの革命（チューリップ革命と四月政変）の比較から
 - 2-1. チューリップ革命とバキエフ政権の5年間の概要
 - 2-2. 四月政変の概要
 - 2-3. 二つの革命の比較から
3. 四月政変の文脈にあるクルグズの領土問題
 - 3-1. クルグズスタンの境界画定以前（1920年以前）
 - 3-2. クルグズスタンの境界画定（1920～1936年：ソヴィエト連邦時代初期）
 - 3-3. オシ事件（1990年：ソヴィエト連邦からの独立直前）
 - 3-4. 中国との国境問題（1996～2002年：アカエフ時代）
 - 3-5. ナルン州の領土の中国への租借未遂（2009年秋季）
4. 四月政変の端緒となったナルン州での出来事
 - 4-1. ナルン州政府における攻防
 - 4-2. ナルン女性五人組の暗躍
 - 4-3. 革命へと若者を動員したナルンの外部環境、内部環境
5. おわりに
 - 5-1. 四月政変は革命と呼べるのか
 - 5-2. 残された課題

現地語表記について

参考文献・参考論文

<キーワード>

クルグズ、革命、ナルン州、領土問題、ナルン州政府の攻防、女性五人組、ナルンの気象

1 本論は、2012年3月に北海道中央ユーラシア研究会において報告したフルペーパー「なぜナルン市民は立ち上がったのか～領土売却問題を巡るナルン州政府における攻防」を改題し、本文を加筆修正したものである。

1. はじめに

1-1. 問題意識

2010年に起こったクルグズスタン（正式な国名は、クルグズ共和国）の二度目の革命「四月政変」²の端緒はクルグズスタン南東部の州都ナルン市における小規模な集会（現地では、「ピケ」「ミーティング」と呼ばれるが、本論では集会と表記する）だった。この集会がタラス州での大規模な集会へとつながり、クルグズスタン全土へ波及していった。それでは、ナルン市での集会はどのような文脈で起こったのか。本論では、ナルン市で集会が起こった背景がクルグズスタンと中華人民共和国（以下、中国と略す）との領土「租借」問題³を端緒にしたスワナリエフ・ナルン州知事の辞任、その後のバキエフ大統領の命で着任したチェキエフ・ナルン州知事の行政手法に叛旗を翻し、ナルン州政府・地方自治部長のジェナリエヴァが職務罷免を覚悟して行なったテレビでの不正告発にあったと考える。この文脈について、当時の新聞記事及び当事者へのヒアリングに基づいて検証する。なお、過去のクルグズスタンに係る領土問題がクルグズ民族の感情にどのような影響を与えてきたのか、また四月政変前後に暗躍した「ナルン女性五人組」がナルン州における行政に与えた影響、さらに四月政変へと若者を動員したナルン州における外部要因、内部要因についても言及する。

1-2. 報告の意義

四月政変の勃発要因は、「電気料金の値上げ」「反対派の粛清」「バキエフ大統領の縁故（同族）主義」などに対する民衆の反発だと報道、解説されている。しかし、そもそもの端緒はどのようなことだったのか。この点に関する考察は十分に行われていない。ナルン州での集会発生の原因と過程を解明し、その背景にあるクルグズ人の民族意識に迫ることは今後クルグズスタンの民主化を推進する上で一定の意味があると考えられる。

1-3. 検証方法

本論の検証方法としては、まず、チューリップ革命と四月政変について、宇山 2006, 2010、浜野 2011、中西 2011 を中心とした先行研究調査（文献調査）を行なった。そこで、疑問点として浮かび上がった「なぜナルンでの集会が端緒となったのか」という疑問を晴らすため、2012年2月12日から2月16日の5日間ナルン市に現地入りし、ナルン州図書館で現地の新聞記事の収集やテレビ番組等の記録を入手して分析を行なった。また、同時期にナルン州政府・地方自治部長のジェナリエヴァ（現ナルン郡政府スタッフ長、女性）やナルン市水道局長のイブラエフと彼の妻イーラへのインタビューから情報の収集を行なった。なお、ジェナリエヴァをインタビュー相手として取り上げた理由は、1980年以降現在に至るまでナルン州の行政に携わり、直近の10年間はナルン州政府に勤務し、ナルン州の行政を知り尽くしているからである。もちろん、2007年7月から2009年6月末までナルン州政府の地方自治部長兼副スタッフ長（実質 No.5）であった。また、2000年に他界した彼女の亡夫もナルン州の行政機関の管理職であり、亡夫の兄（義理の兄）の二人の息子（甥）は長男のヌルベクがナルン市の第一副市長、次男のアイベクはバキエフ政権下でバキエフ大統領の息子のマキシムの直下で共に働いていたという点において、当時の中央・地方の政界情報に精通していたからである。また、ナルン市の水道局長であるイブラエフは、自身がエンジニアとして毎日街を周り続け、市井の情報に精通していたこと。また、彼の妻がバザールにある裁縫工場の社長をしていることから情報が集中するバザールにおける情報に精通しているからである。なお、当初中国への領土租借問題の真相に迫るため、当事者のスワナリエフ州知事へのインタビューを予定していたが、先方との都合がつかず実現しなかった。

2. 二つの革命（チューリップ革命と四月政変）の比較から

クルグズスタンで起きた今世紀の二度の革命（2005年のチューリップ革命、2010年の四月政変）に対する考察については宇山 2006、2010 並びに浜野 2011 などがある。それぞれの考察から、端緒と文脈を概観すると

2 本論では、浜野 2011 に倣い、2010年4月7日の革命を「四月政変」と称す

3 ナルンの人々の間では「売却」と言われているが、現地新聞テニル・トーでは「租借」と解説されている。

下記のようにまとめられよう。

	チューリップ革命（2005 年 3 月 24 日）	四月政変（2010 年 4 月 7 日）
政権	アカエフ大統領（1990 年 10 月就任）	バキエフ大統領（2005 年 7 月当選）
主要対抗勢力	オトゥンバエヴァ（首謀者） バキエフ・クルマンベク ＋外国勢力、イスラム過激派、犯罪集団（アカエフ）	オトゥンバエヴァ（首謀者）、ベクナザロフ アルマズベク・アタムバエフ
対抗勢力の目標	●アカエフ大統領の退陣と国会議員選挙のやり直し（浜野 2011）	●バキエフ大統領の退陣（浜野 2011）
革命の端緒	●2002 年：ベクナザロフ副議長逮捕に対する抗議（宇山 2010） ●2001 年：南部政治家（マサリエフ、ベクナザロフ、マドゥマロフ）による「アカエフに退陣、国民に改革を」運動（中西 2011）	●2010 年、前国防相で反対派に転向したイスマイル・イサコフが在職中の職権乱用の罪を着せられて懲役 8 年の刑を宣告、彼の出身地で抗議デモが行われる（宇山 2010） ●3 月のナルンでの光熱費値上げに抗議する集会（宇山 2010、浜野 2011） ★★★ 具体的には何が端緒なのか？
直接的な原因	●オトゥンバエヴァ元外相の候補者登録が拒否されたこと（宇山 2006）	●光熱費の値上げ ●携帯電話の着信費用 ●政変前日の野党指導者の逮捕（浜野 2011） ★★★ 直接的な原因はこれだけなのか？
根本的な原因（遠因）	●「体制派エリートの結束の弱さ」「政権側の腐敗による国民からの信頼低下を、言論の介入、反対派への暴力、選挙の不正で埋め合わせようとして失敗」「民主主義を掲げながらも選挙を通じた政権基盤の確率がうまくいかず、程度の差はあれ権威主義的な手法に頼ったことが、様々な矛盾を生んだ」「経済が不調で、生活の苦しさそのものと、それにもかかわらず大統領周辺が利益をむさぼっていたことが、二重に国民の不満を煽った」（宇山・前田・藤森 2006） ●アメリカによるマスコミ対策と青年組織の組織化に重点をおいた民主化推進 [CIA による Freedom House/Open Society Institute 等の組織、首都だけでなく地方都市における NPO を設立、Peace Corps、中央アジアアメリカ大学]（浜野 2011）	●農村から首都にきたものの土地・住宅を買えないでいる貧民の存在や、民族間の緊張という、クルグズスタンが以前から抱える問題が前面に出てきている。そのほか、混乱に乗じて他人の財産や企業を乗っ取ろうとする人々もいる。チューリップ革命の時もそうだったが、群衆の力と混乱によって前政権を倒した新政権は、自らも混乱への対処に長く苦しめられるのである（宇山 2010） ●バキエフ政権の底知れない不正と強権的体質（浜野 2011） ●農村出身の貧困層の増加（浜野 2011） ★★★ 根本的な原因はこれだけなのか？
革命の文脈	1 月 6 日：オトゥンバエヴァの選挙登録拒否 2 月 27 日：国会選挙（第一回目：31/75 結果確定） 3 月 13 日：決選投票（42/75 選挙区） 3 月 15 日：ジャララバードで反対派のクルルタイ 3 月 19 日：オシで反対派のクルルタイ 3 月 22 日：新国会開催、23 日に都心部で抗議集会 3 月 24 日：反対派の指導者が結集し、大規模なデモ 大統領府突入、アカエフ逃亡 （以上、宇山 2010、浜野 2011 を参考に作成）	2～3 月：ナルンでの野党集会が始まる 3 月 17 日：首都ビシケクで反対派のクルルタイ開催 3 月 23 日：大統領サイドによる「和合クルルタイ」開催 4 月初め：ナルン州などの電気料金値上げの撤回表明 4 月 6 日：タラスでの野党集会で「人民知事」選出 4 月 6 日：治安機関による野党指導者の捕縛、投獄 4 月 7 日：予定されていた野党大集会を指導者不在のまま実施、アラトー広場へ向けたデモ行進、群衆が全国の地元庁舎を次々に占拠、大統領府への突入、ウセノフ首相辞任、バキエフ大統領逃亡 （以上、宇山 2010、浜野 2011 を参考に作成）
革命の結果	●アカエフ政権の転覆 → バキエフ大統領 ●5 名（ビシケク市民 3 名、オシの警官 2 名）の犠牲者	●バキエフ政権の転覆 → オトゥンバエヴァ暫定大統領 ●議会政治制への移行 ●87 名（市民 85 名、警官 2 名）の犠牲者

<宇山 2006, 2010、浜野 2011、中西 2011 などに基づいて筆者作成>

2-1. チューリップ革命とバキエフ政権の5年間の概要

＜チューリップ革命に至る経緯＞

チューリップ革命の端緒については、宇山 2006 において、「アジムベク・ベクナザロフ副議長（検察・裁判担当）はアカエフ時代に中国との国境画定をめぐる政権を非難し、2002 年に逮捕されたが、彼の逮捕に抗議して同年 3 月に起きた集会と治安部隊の衝突「アクス事件」が、チューリップ革命に向けての動きの出発点となった」⁴とされている。また、中西 2011 においては、2001 年に南部政治家（マサリエフ、ベクナザロフ、マドゥマロフ）による「アカエフに退陣、国民に改革を」運動が始まったことを上げている⁵。

また、チューリップ革命の直接的な原因は、宇山 2006 において「オトゥンバエヴァ元外相の候補者登録が選挙区の選挙管理委員会によって拒否され、これに抗議する集会がビシケクで数日間にわたり開かれた」⁶ことと分析している。また、オトゥンバエヴァ元外相の候補者登録拒否の理由として「同じ選挙区から立候補を予定していたアカエフの娘、ベルメット・アカエヴァの有力な競争相手を排除することにあった」⁷と推測している。

その後、「ナルン州のコチコル選挙区では、2 月 21 日にアクルベク・ジャパロフ、バイシェンベク・ボロトベコフ、クルマンベク・パイテレコフの 3 人の候補者登録が選挙民買収の嫌疑で取り消され、これに抗議する人々が翌日から、ビシケク〜トルガルト（中国国境）街道を封鎖」⁸するなど反対派は実力行使に出ている。2 月 27 日の国会議員選挙以降、「政権側による多くの不正が行われたとする反対派の抗議集会が、翌日から首都や南部で開かれ」⁹、3 月 13 日に再選挙が行われることになった。再選挙までにも全国各地で選挙に対する反対運動がクルグズスタン南部を中心に行われ、時に道路や州庁、空港の封鎖などの実力行使にまで及んだ。その後、3 月 15 日にジャララバードで反対派のクルルタイが、19 日にはオシで反対派のクルルタイがそれぞれ行われた。その後、3 月 22 日の新たに国会が開催されるや否や翌 23 日には都心部で抗議集会が行われ、3 月 24 日には反対派の指導者が結集して、大規模なデモが行われた。その後、群衆は大統領府突入、アカエフは逃亡。この革命において、ビシケク市民 3 名、オシの警官 2 名の計 5 名の犠牲者が出た。また、アカエフ政権は転覆し、バキエフが後任として大統領の職を引き継いだ。

革命発生の根本的な原因としては、宇山・前田・藤森 2006 において、以下のように述べられている。まず、根本的に「体制派エリートの結束の弱さ」¹⁰があった上、「政権側の腐敗による国民からの信頼低下を、言論の介入、反対派への暴力、選挙の不正で埋め合わせようとして失敗」¹¹した。また、「民主主義を掲げながらも選挙を通じた政権基盤の確立がうまくいかず、程度の差はあれ権威主義的な手法に頼ったことが、様々な矛盾を生んだ」¹²こと。さらには、「経済が不調で、生活の苦しさそのものと、それにもかかわらず大統領周辺が利益をむさぼっていたことが、二重に国民の不満を煽った」¹³としている。また、浜野 2011 によると、「アメリカによるマスコミ対策と青年組織の組織化に重点をおいた民主化推進（例えば、CIA による Freedom House/Open Society Institute 等の組織、首都だけでなく地方都市における NPO の設立、Peace Corps. の投入、中央アジアアメリカ大学の設立など）」¹⁴が進められたことを挙げている。

4 宇山智彦（2010 年）、P2-3

5 中西健（2011 年）、P105

6 宇山智彦（2006 年）、P41

7 宇山智彦（2006 年）、P43

8 宇山智彦（2006 年）、P43

9 宇山智彦（2006 年）、P43

10 宇山・前田・藤森（2006 年）、P79

11 宇山・前田・藤森（2006 年）、P79

12 宇山・前田・藤森（2006 年）、P79

13 宇山・前田・藤森（2006 年）、P80

14 浜野道博（2011 年）、P52

なお、チューリップ革命では、「アカエフ大統領の退陣と国会議員選挙のやり直し」¹⁵を求めて、オトゥンバエヴァが首謀者として名を連ねている。その一方で、アカエフは『イズヴェestia』において「2005年の議会選挙を直接の契機とする反対運動と政権交代（チューリップ革命）に関連して、当時のアカエフ大統領は、外国勢力、イスラム過激派と犯罪集団が大きな役割を果たした」¹⁶と述べている。

＜バキエフ政権の5年間＞

バキエフ政権下、約3年間にわたって在クルグズ共和国日本国臨時代理大使としてクルグズスタンに駐在した笠井達彦の回想を元に振り返ってみる。笠井の回想は、私が2007年7月から2009年の6月末まで滞在した時に感じた印象とほぼ同じだからである。

「「チューリップ革命」が発生し、アカエフ政権が崩壊し、情勢が一挙に不安定となり、その後3年間クルグズスタン内政は「安定」と「不安定」の間を行ったり来たりであった。新しく成立したバキエフ政権は政治的・経済的安定を醸し出そうとするが、現実には多くの反政府集会、要人暗殺、暴動が国内で発生し、外交面でもアンディジャン事件によるウズベク難民問題、国境紛争、イスラム過激派のクルグズスタン侵入事件が起こり、状況がヴァルネラブル（筆者注：vulnerable。「脆弱さ」「弱々しさ」の意）であることを見せつけた」¹⁷と評している。笠井が着任した3年間のみならず、バキエフ政権樹立から崩壊までの約5年間、クルグズスタンを取り巻く国内外の情勢は「安定」と「不安」の間を行き交っていた。

「2006年11月から2007年12月までの内政は圧巻ですらあった。大統領に集中していた権限を分解すべく憲法改革を巡る論議が行われる中で（バキエフ大統領は憲法改革を公約とした）、そのスピードが遅いことに不満の反バキエフ派が各地で発生不集会や道路封鎖を展開し、当局側は放水、ガス弾でこれに対抗した。このプロセスはクルグズ国民をバキエフ派と反バキエフ派に二分化させ、長らくを潜めていたクルグズスタンにおける『北vs南』の対立構造を表面化させた」¹⁸としている。しかし、単純に『バキエフ派＝南』『反バキエフ派＝北』といった二項対立ではないように思われる。

このような中、バキエフ政権下で大統領案と議会案の二つの新憲法が採択されたが、「2007年10月にバキエフ大統領案の新憲法が国民投票を経て成立し、右に基づき、12月には議会選挙が行われ、その後、政治は急速に落ち着きを取り戻した」¹⁹とされる。

「2008年には食料品・燃料価格の上昇、並びに、世界経済の不安定さ、特に大きな対クルグズスタン投資国である隣国カザフスタン経済の不安定さが陰に陽にクルグズスタン経済に影を落とし始めた」²⁰とあるが、筆者自身も物価の急激な上昇を経験した。例えば、1枚8ソムだったナン（リピーョシカ）が一気に12ソムにまで高騰したからだ。これは、主にカザフスタンから輸入される小麦の値段が跳ね上がったためである。

また、「水不足は、水力発電に電力の90%を依存しているクルグズスタン経済に深刻な電力不足と国民生活・経済に直接の影響を及ぼした。（中略）クルグズスタン当局は、各家庭の主たる暖房源である電気ボイラーにつながる電線を強制的に切断するという強硬手段を取るに至り、その余波で、国民は石炭を買いあさり、石炭価格は3倍にまで上昇し、国民の不満がさらに高まった」²¹とある。この時期、計画停電という名の無計

15 浜野道博（2011年）、P62

16 中西健（2011年）、P18

17 笠井達彦（2009年）、P1

18 笠井達彦（2009年）、P1-2

19 笠井達彦（2009年）、P2

20 笠井達彦（2009年）、P2

21 笠井達彦（2009年）、P2

画停電が相次いだ。JICA からは、村の戸建て住宅にホームスティしている青年海外協力隊員に対して、1 トン＝2000 ソム（4000 円弱）の破格の値段で石炭の供給が行なわれた。私もクバルティーラの温水供給停止に備え、前述したナルン市水道局長の一戸建ての家に対して2トンの石炭を購入し、避難場所を確保したくらいである。この頃「バキエフはカザフスタンへの売電を優先し、国民に停電を強いた」という声を現地人からいく度となく聞いた。

また、「水不足はウズベク、カザフの農業に直接影響し、夏季の農業期にクルグズスタンに貯水池からの放水を迫るこれらの国との間で軋轢が高まった」²²とあるが、確かにこの頃のラジオ放送²³は隣国ウズベクスタンとの放水問題を連日のように取り上げていた。

「価格自由化、国営企業解体、民営化、起業、競争、独占禁止、倒産法整備、規制緩和、貿易自由化、金融自由化、土地自由化、資本市場・保険市場・労働市場整備等の施策により、同国に競争力のある複数の産業が生まれ、経済構造が多角化され強化されるべきであるが、実際には、生産面では、農業（特に牧畜）と金生産というモノカルチャーから脱皮できているとは見えないし、貧困が今なお相当程度見られる」²⁴ということで、市場経済化政策は多くの国民を豊かにせず、国民間での経済格差をもたらしている。また、後述するが、移民経済は2010年の海外からの送金が12億ドルを超え、GDPの25%以上²⁵を占めている。よって、ロシアやカザフスタンへの移民（出稼ぎ）なくして生活が成り立たないといった家庭も多く、移民経済はクルグズスタンの経済を支える大きな屋台骨となっている²⁶。

笠井 2009 では、貧困層がいまなお見られる現状に対して「この3年間（筆者注：笠井の着任期間）の政治的不安定さに起因するものなのか、そもそも、「市場経済＝健全な経済の達成」という目標を掲げること自体が誤りなのか分からない」²⁷と述べているが、私自身は急速な自由化により、自由を制御できなくなり、国民全体（とくに政治家や企業家）が目先の利益を優先し、追求する風潮が強まったことが原因にあると考えている。また、笠井は「現代社会は、資本主義的要素と社会主義的要素が混在する Mixed Economy であるし、それぞれの要素がどの程度当該経済に混入しているかは国によって様々である」²⁸としているが、筆者はクルグズスタンの場合は社会主義的な観点（所得再分配など）を軽視し過ぎたことがクルグズ社会を不安定なものにしたと考える。

2-2. 四月政変の概要

四月政変の直接的な原因は、宇山 2010 では「2010 年に入ると、前国防相で反対派に転向したイスマイル・イサコフが在職中の職権乱用の罪を着せられて懲役8年の刑を宣告され、彼の出身地などで抗議行動が活発化した」[3月にはナルンで光熱費値上げに抗議する集会が始まるなどバキエフ批判の運動が各地に広がった。政権側はクルグズスタン情勢を批判的に報じる外国のウェブサイトやラジオ放送を遮断したが、これに対しても抗議行動が頻発した」²⁹としている。

また、背景にある根本的な原因として、宇山 2010 では「農村から首都に来たものの土地・住宅を買えないでいる貧民の存在や、民族間の緊張という、クルグズスタンが以前から抱える問題が前面に出てきている。そのほか、混乱に乗じて他人の財産や企業を乗っ取ろうとする人々もいる。チューリップ革命の時もそうだった

22 笠井達彦（2009 年）、P2

23 毎朝のアザトック・ラジオ（Azattyk）より

24 笠井達彦（2009 年）、P2

25 世界銀行の統計より

26 堀江典生（2010 年）

27 笠井達彦（2009 年）、P3

28 笠井達彦（2009 年）、P3

29 宇山智彦（2010 年）、P1

が、群衆の力と混乱によって前政権を倒した新政権は、自らも混乱への対処に長く苦しめられるのである」³⁰という社会的背景を挙げている。

四月政変ついて、宇山 2010、浜野 2011 を参考にその文脈を辿ると、2010 年 2、3 月にナルンでの野党集会が始まったことを端緒として、全国で小規模な野党集会が開催される。3 月 17 日（水）には首都ビシケクで反対派のクルルタイが開催された。これに対抗して、3 月 23 日（火）には、大統領サイドによる「和合クルルタイ」が開催された。4 月初めに当局はナルン州などの電気料金値上げの撤回表明。しかし、すでに遅く、4 月 6 日（火）にはタラスでの野党集会で警察が乱入したことで州庁舎に群衆がなだれ込み「人民知事」選出、これに対して同日治安機関による野党指導者の捕縛、投獄が行われた。翌 4 月 7 日（水）には、予定されていた野党大集会が指導者不在のまま実施され、アラトー広場へ向けたデモ行進が行われた。全国でも群衆が地元庁舎を次々に占拠。首都ビシケクでは、群衆が犠牲者を出しながらも大統領府へ突入。同日 19 時にウセノフ首相が辞任を表明し、20 時にバキエフ大統領は小型機で故郷ジャララバードへ逃亡した。

2-3. 二つの革命の比較から

上述した二つの革命を比較すると、革命の端緒として、チューリップ革命では「アクス事件」を挙げることに一定の目処が付いているが、四月政変では何故ナルンで起こった集会が全国に拡大したのかが今ひとつ腑に落ちない。当局（行政府）の規制が厳しい中で、喻え集会を開いたとしても、報道規制などにより、全国において集会を誘引するものとは成り得ないのではないかと考えたからだ。何が集会を開催する端緒となり、一定数の民衆を誰がどのように集会へと動員したのか。こうした疑問を抱いている時に、上述したように、「スワナリエフの辞任」「中国への領土租借疑惑」「ナルン州政府での攻防」などの情報が耳に入ってきた。これらの出来事に関連性を見出すことはできないのか。そこで、チューリップ革命の時のようにクルグズスタンの領土問題が今回の四月政変勃発の根本的な要因となり、クルグズ民族を革命へと動員させたのではないかという仮定を得ることになった。

3. 四月政変の文脈にあるクルグズの領土問題

本節では、これまでにクルグズ民族が直面した領土（境界）問題を概観しながら、クルグズ民族にとっての領土意識を振り返り、今回の四月政変の文脈のなかで領土問題がどの程度作用したのかを考察する。

3-1. クルグズスタンの境界画定以前（1920 年以前）

17-18 世紀頃までにクルグズ人の民族形成が進行し、18 世紀後半から 19 世紀前半にはコーカンド・ハン国による支配を受けた。さらに、1855 年～ 1876 年の間にロシア帝国に併合された。この間新疆ウイグル地区の民族運動との関連では、「過去にキルギスと中国との往来は頻繁に有り、牧畜民どうしの交流、帝政ロシア時代のキルギス弾圧の際の中国への大量避難、逆に中国の混乱時代のウイグル、ドンガン各部族のキルギス流入等がみられた」³¹とあるように、境界画定以前は厳密なものでは無かったと考えられている。1918 年 ロシア革命後、ロシア連邦共和国内の「トルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国」の一部となった。

3-2. クルグズスタンの境界画定（1920 ～ 1936 年：ソヴィエト連邦時代初期）

現在中央アジア 5 ヶ国の境界画定は、「1920 ～ 1936 年にかけて、民族分布、地域分布、各民族のエリート の要求」³²を勘案して行われた。この間、1924 年には中央アジアの民族・共和国境界確定により、ロシア連邦共和国内のカラ・キルギズ自治州となった。その後、1926 年 2 月にキルギズ自治ソヴィエト社会主義共和

30 宇山智彦（2010 年）、P5

31 森泉達士（1994 年）

32 中西健（2011 年）、P74

国として成立し、1936 年にはロシア連邦共和国から分離し、ソ連邦を構成するキルギズ・ソヴィエト社会主義共和国に昇格した。

この間における境界確定は、「スターリンによる恣意的な線引きであり分割統治が目的であった見方が有力」であるとされる。クルグズスタンとウズベクスタンの境界は「フェルガナ盆地の経済的重要性から難航」した。クルグズ人はアンディジャン市（現ウズベクスタン領）、ウズベク人はオシ市（現クルグズスタン領）をそれぞれ要求したが、「行政区域の実質を確保するために都市とバザール（市場）が必要との観点から、ウズベク人の多いオシ市などがクルグズスタン領に」入り、「クルグズ人が要求していたアンディジャン市がウズベク領に」入った。このことにより、「両民族に不満を残すことになった」。

3-3. オシ事件（1990 年：ソヴィエト連邦からの独立直前）

オシ事件とは、1990 年 6 月にフェルガナ盆地にあるクルグズスタン領土のオシ近郊で起きたクルグズ人とウズベク人との土地問題に端を発した衝突である。「オシ・アイマグ（オシ地方）」運動を組織したクルグズ人がウズベク人のコルホーズ農地が広がるオシ市郊外のレーニン郡を住宅地化するようにオシ州の共産党に要求。共産党当局は一旦受諾したが、すぐに撤回。同時期、ウズベク人はウズベク人の自治を掲げる「アディラト（正義）」を組織し、クルグズ人へのナン（パン）不買運動やクルグズ人の賃貸入居者の追い出しを行なう。オシ近郊にて両民族の政治集会对峙。ウズベク人側には救出を目的にウズベクスタン本国から国境を超えてやってきた応援者に対して治安当局が発砲、ウズベク人側に死傷者が出たことにより、両民族の衝突が起きた。この衝突に対して、両国政府は、戒厳令を発令し、ソ連軍を送り込むことにより短期間のうちに収拾したが、約 320 人の死者を出した。

3-4. 中国との国境問題（1996 ～ 2002 年：アカエフ時代）

オシ事件以降、クルグズスタンでは 1990 年 10 月にアカエフが大統領として就任し、同年 12 年 12 日に「クルグズスタン共和国」と改名、主権宣言を行なった。さらに、1991 年 8 月 31 日に共和国の独立を宣言する。1993 年 5 月には国名を「クルグズ共和国」に変更。この間、クルグズスタンと中国の国境は、北はクルグズスタン・中国・カザフスタン三国の交点であるハンテングリ峰、南はクルグズスタン・中国・タジキスタン三国の交点にまであり、全長約 1096 キロメートルに及んでいた。

1996 年 7 月 7 日に両国は国境協定を締結し、1999 年 8 月 26 日には補足協定を結び、全面的に国境問題を解決。2002 年 6 月クルグズスタンと中国との間に友好協力条約が締結され、国境（境界）確定と標識樹立の作業も終了。両国政府の承認を得て、トルグチャトとイルケシタムの二つの交易所が開設。2003 年 3 月に裁判所が、2002 年 5 月の補足協定批准を再検討し、中国への領土移管の正しさを確認したことにより、法的にも中国都の領土問題は解決。

しかし、2002 年 3 月 18 日国境交渉反対集会在起こり、これに対して警官が発砲し、6 名が死亡。また、同 2003 年 3 月末に、ピシケクからカシュガルに向かう国際バスがコチュコルを過ぎた辺りで、襲撃され、乗客乗員 21 名全員が射殺される事件が起こった。なお、死者のうち 19 人が中国籍で、大多数はウイグル人であった。この領土問題が後のチューリップ革命への端となったとされる。

中国にとって隣国クルグズスタンとの国境画定問題は、中央アジアにおいて先頭に立って民主化を推し進めるクルグズスタンの影響力に歯止めをかけ、自国の新疆ウイグル自治区に対する多数の少数民族の民族自立の動きを牽制する上で重大な関心事であったと考えられる。

この国境確定により、「中国領になった領土よりクルグズスタン領と認められた領土のほうがはるかに大きいにもかかわらず、結果的にはソ連時代の国境線からクルグズスタンが後退することになったため、アカエフ

非難の格好の口実になり、反対運動が盛り上がった」³³。

3-5. ナルン州の領土の中国への租借未遂（2009 年秋季）

2009 年秋季バキエフ大統領（当時）は息子のマキシム・バキエフと共謀し、ナルン州にある領土の一部（アクサイ、アルパ、ジェティム・トーなど）を中華人民共和国に売り渡すため、自らが任命したスワナリエフ・ナルン州知事（当時）に対して承諾のためのサインを求めたが、スワナリエフ州知事はこれを拒否。自らナルン州知事の職を辞し、ナルン州第一副知事のバカショフと共にナルンを去った。なお、こうした事実はバキエフの圧政を恐れた新聞社の判断により、記事になることはなく、民衆の間で伝わってきた話である。

以上、「部族は母、土地は父（Эл-эне, жер-ата）」と言われるように、遊牧を生業としてきたクルグズ民族にとって土地に関わる問題は重大な関心事の一つである。これまでの歴史を見てもクルグズ民族が領土問題に対して神経過敏になっていることが分かる。第一章で見たように、宇山 2010 では、「アジムベク・ベクナザロフ副議長（検察・裁判担当）はアカエフ時代に中国との国境画定をめぐる政権を非難し、2002 年に逮捕されたが、彼の逮捕に抗議して同年 3 月に起きた集会と治安部隊の衝突「アクス事件」が、チューリップ革命に向けての動きの出発点となった」³⁴ とあるように、国境確定問題がチューリップ革命の端緒となっていることと分析されている。また、2010 年の四月政変以前に「ナルンで行われたチェキエフ州知事と民衆の間で行われた対話集会において、民衆から『領土租借』に対する質問が相次いだ」³⁵ ことから、クルグズの領土問題はナルンの民衆にとっての関心事の一つであったと考えられる。

4. 四月政変の端緒となったナルン州での出来事

今回の四月政変の端緒はナルン市での小規模な集会であったとされる。この集会はどのようなことが端緒となって行われたのか。本節では、①ナルン州政府における攻防、②ナルン女性五人組の存在、③ナルンを取り巻く外部環境と内部環境ということから見ていきたい。

4-1. ナルン州政府における攻防

2010 年 2 月 11 日（木）、ナルン州政府の地方自治部長で副スタッフ長であったジパーラ・ジェナリエヴァは、TV-1（Билинчи канал）のクンドゥズ・ジョルドゥバエバ他 1 名の記者、カメラマンら共にナルン州政府のチェキエフ州知事の行政手法を批判するテレビ取材の撮影を極秘裏に行なった。この取材は、6 分 21 秒のニュースにまとめられた。翌 12 日（金）ジェナリエヴァはナルン州政府を辞し、ナルン郡政府のスタッフ長へ移籍。13 日（土）、TV-1 のクルグズ語による全国放送にて同取材のニュースが放送され、首都ビシケクを初め、全国において反響を呼ぶ。16 日（火）の同チャンネルのロシア語による全国放送において、クルグズ語放送の時から手が増えられた内容の放送が行われた。大統領府において、バキエフ大統領の息子マキシムの下で働く親戚を持つジェナリエヴァの甥からの情報によると、13 日（土）のテレビを観たバキエフ大統領が息子に指示して、番組の内容に手を加えたとのこと。

上記テレビ放送が行われた週末の 2 月 20 日（土）、ナルン市の東の街外れにあるウルトゥスという場所において、100 名ほどの参加者による野党集会が行われた。この集会への若者の動員において、後述するナルン女性五人組が寄与したと言われている。この集会は、当局の規制により、新聞やテレビにおいて報道されることは無かった。

33 浜野道博（2011 年）、P46

34 宇山智彦（2010 年）、P2-3

35 「テニル・トー」 テニル・トー（ナリン州発行の行政新聞）、2010 年 4 月 13 日

来たる４月７日（水）の早朝、ナルン市中央部の北にあるスタジアムにおいて 200-300 人規模の集会が行われた。ここには、オトゥンバエヴァやベクナザロフの姿が確認されている。ここでは、ラジオ放送をアザトゥクが放送したが、そのほかのメディアによる報道は当局の報道規制により行われなかった。ジェナリエヴァによると、２月 20 日のナルンでの集会以降、オトゥンバエヴァとベクナザロフの両氏は地道に全国各地を回って野党集会を盛り上げていたとのことである。

それでは、なぜジェナリエヴァはチェキエフ州知事に対して叛旗を翻したのか。それは、2009 年 11 月 11 日（水）のチェキエフのナルン州知事就任直前まで遡ることになる。同年 10 月 27 日（水）、ナルン州の行政 70 周年を祝う式典にバキエフ大統領が駆けつけた。その時に、バキエフ大統領はスワナリエフ州知事に対して、ナルン州の一部（アクサイ、アルパ、ジェティム・トー）を中国に売り渡すための承認を求めた。しかし、スワナリエフはこれを拒否し、二週間後の 11 月 11 日（水）に解任された。³⁶その後、ナルン州知事の職に就いたチェキエフは、就任日に私用でビシケクへ行って不在にしていたジェナリエヴァを激しく非難。ジェナリエヴァはこれがショックで入院する。³⁷ナルン州を理解していないチェキエフの行政は上述した２月の撮影の日までに入退院を繰り返しながら、自らの精神の解放のために上述した報道を準備しながら、ナルン郡への移籍を進めた。

四月政変前後のナルン州の行政府のリーダーはナルン州知事の交替によって、少なからず影響を受けている。チェキエフ自身も電気料金の問題に対して民衆を混乱させた責任をとって、バキエフによって更迭された。その後、ナルンにおいて民衆から一定の信頼を得ている、ナルン国立大学の学長を務めるアクマタリエフがバキエフによって専任された。なお、チェキエフ・ナルン州知事は犯罪組織とのトラブルにより 2010 年半ばに暗殺されている。ナルン州の行政府の主要人事の変遷は下記のとおりである。

表 2：ナルン州行政人事の変遷

	2009/11/11→	2010/3/9→	2010/4/7→	2010/8→	2011/2→
ナルン州知事	スワナリエフ (バキエフ選任)	チェキエフ (バキエフ選任)	アクマタリエフ (バキエフ選任)	エセンベコフ (人民知事)	マムベトフ (オトゥンバエヴァ選任)
第一副知事	パカシヨフ	ジュマカノフ		アルムクロフ	
第二副知事	サバルバエフ				サルダルベコフ
第三副知事	エセナマノヴァ				
スタッフ長	アブサマトフ	ボガチーフ		スバゴジェフ	
副スタッフ長	ジェナリエヴァ		ウムラリエフ		
ナルン郡知事	メデトフ			マムロフ	
ナルン市長	クルマトフ			モルドカドゥロフ	ジェナリエフ

＜ジェナリエヴァへのインタビューを元に作成＞

4-2. ナルン女性五人組の暗躍

ナルン女性五人組は現地では文字通り「ベシ・アヤル（Беш Аялы）」と呼ばれ、2010 年の四月政変や政変後のナルン州の行政に少なからず与えている。私が女性五人組の存在を知ったのは、2010 年 8 月ナルンを訪問した際である。また、同時期、私の元職場であるナルン州政府の州庁舎へマムベトフ州知事を表敬するため

36 ジェナリエヴァへのインタビューより
37 クルグズ人と共にナルンでは職場で強度のストレスを感じると病院に入院することが多い。もともと塩分の多い食事をしているため、血圧が高くなっている。また、ナルン市は 2030m の高地のため、血圧が上がりがやすい。ここにストレスが加わると血圧が急上昇し、心臓病や脳卒中になるからだ。実際に 2011 年に就任した現ナルン知事が州政府のラシッド部長をクビにすると聞いた日に部長は心臓発作で亡くなった。

に出向いた際、州知事の部屋の待合室で一人の女性を見かけた。後から聞いた話によると、彼女が女性五人組の一人であるとのこと。正確な年齢は判別し難いが、概ね 50 歳前後だと推測される。

オトゥンバエヴァ大統領は彼女らが四月政変を強力に牽引したことを表し、2010 年に「バトル（戦士）」のメダルを彼女たちに授与した。その後、大統領に就任したアタムバエフは彼女らの行動を規制したため、現在は平静を保っている。しかし、現地での彼女たちに対する評判は「バザールにおいて野菜などを売っている教養のない 5 人の女性」である。それでは彼女らはいったどんな女性なのか、また四月政変にどのように関与したのか。

ナルン女性五人組の実像を聞いた話を総合すると、「普段ナルンのバザールの野菜売り場で野菜を売っている」「教養のない女性達」であり、一番の功績は四月政変に至る過程において「デモや集会への若者の動員に寄与」し、四月政変直後に「人民州知事であるエセンベコフを据えたこと」である。「犯罪組織とつながっている」「若者に金を与えて行政府の管理職を脅し、若者に与えた以上の金を巻き上げている」。自らも「州知事や郡知事、市長を訪問し、四月政変の功績を掲げながら、犯罪組織との関わりを示唆しながら、行政府に対して不合理な要求を突きつけ、行政府のポストやお金を巻き上げている」。実際に、「四月政変後ナルン市長であったアルマズ・クルマトフの家族を脅し続け、6 月にナルン市役所から追い出した」とのことであった。³⁸ アルマズ・クルマトフは、アクタラ県の出身で、外務官僚を経て在外公館で勤務した後、アクタラ郡知事からナルン市長へと転身した改革派の市長であった。

以上、ナルン女性五人組が四月政変に至る過程において「デモや集会への若者の動員に寄与した」ことは四月政変という革命発生のメカニズムを考える際にひとつの重要な要因となろう。また、浜野 2011 で述べられているように、「クルグズの政治集会はそれがどこまで自発的意思で集まった人々であるのか注意深く見なければいけない」³⁹ という点については、ナルンにおけるデモや集会に動員された核となるべき民衆が野党やナルン女性五人組を通じて金銭によって「集められた人々」であったことが明らかになった。

なお、浜野 2011 では、「クルグズでは数千人の動員をかけるには日本円で数千万円の費用がかかると言われている。逆に言えば、数千万円あれば政治大集会が組織できる」⁴⁰ とし、「集会参加者は「あご足付き」、つまり、往復の交通費もしくは交通手段が提供され、一日三回食事が出され必要に応じて宿泊場所も確保される。また、これに加えて大切なのは日当が支払われることである。日当は 500 ソム（約 870 円）」が普通で、時には 1000 ソム（約 1700 円）も奮発されることがある」⁴¹ としているが、今回のヒアリングでも四月政変に際して、ビシケクでの野党集会への参加者には一人あたり 5000 ソム（約 10,000 円弱）が支払われたことが確認できている。

4-3. 革命へと若者を動員したナルンの外部環境、内部環境

何故、クルグズスタンの二つの革命は早春に起こったのか。これは非常に興味深い点である。筆者は登山を行うが、早春の登山はとくに注意せよと言われる。冬眠から目醒め、飢えたクマが限られた食糧を求めて徘徊するからだ。人間社会の現象を自然現象に直接当てはめるのは多少無理があるかもしれないが、根本的なところは変わらないと筆者は考えている。

クルグズスタンの地方都市や農村部では、晩夏から秋口にかけて収穫された野菜はバンカと呼ばれる瓶に塩

38 本段落の「 」内の言葉は、現ナルン郡スタッフ長のジェナリエヴァ、現ナルン市水道局長のイブラエフ、イブラエフの妻（バザールの近くの裁縫工場の社長）などからのヒアリングに基づく。

39 浜野道博（2011 年）、P50

40 浜野道博（2011 年）、P50

41 浜野道博（2011 年）、P50

漬けにして蓄え、果物は砂糖といっしょに煮たりしてコンポートやジャムにして蓄える。また、じゃがいもや人参などはパドヴァルと呼ばれる地下の貯蔵庫に蓄える。集合マンションにおいても、建物の地下に倉庫があり、そこに保管する。冬場の食料やビタミン確保に向けた世界共通の知恵である。

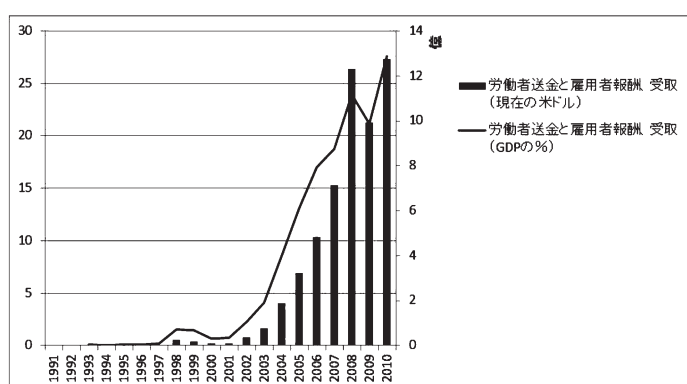
しかし、晩冬や春先の農村は前年に蓄えた食料が尽きかけており、厳しい状況に置かれている。バザールに行けば中国などから輸入された生鮮食品が無いわけではないが、2～3倍の価格で販売されており、一般家庭とくに貧農にはとても手が出せない。クルグズスタンの冬場の農村の一日のメニューは、朝食はナンと紅茶、昼食もナンと紅茶、夕食は蒸したじゃがいもたまに羊肉というのが一般的である。また、晩冬や春先には現金も尽きるため、少し暖かくなってくると職のない若者は現金収入を求めて地方都市や都会に集まってくる。この頃になると、冬季に中断されていた土木・建設工事が再開されるからだ。こうした若者をデモや集会に動員するのは容易であろう。

さて、2010年の春先、ナルンを取り巻く外部環境、内部環境はどうだったのか。食料は足りていたのか、職はあったのか。

＜ナルンを取り巻く外部環境＞

まず、外部環境という点において真っ先に思い出されるのは、2008年9月15日の米国の投資銀行リーマン・ブラザーズの破綻が引き金となった世界同時不況である。この世界同時不況の余波で翌2009年にかけてロシアやカザフスタンなどの海外からの出稼ぎ者からの送金が大幅に落ち込み、一部の出稼ぎ者の帰国が相次いだことであろう。下記のグラフから分かるように、2008年に12億米ドルあった海外からクルグズスタンへの送金は2009年には9.9億ドルにまで落ち込んでいる⁴²。いわゆるリーマンショックによるクルグズスタンへの直接的な影響は少なくなかった。とくに若者の3人に1人が出稼ぎに出ている移民経済に与えた影響は大きかった。この結果、労働市場が供給過剰になり、街中に若者の失業者が溢れることになった。これは、クルグズスタンのGDPが落ち込んだことはもちろんのこと、家計の最終消費支出を見ても、2008年の112.5億ドルから一転、2009年には102.3億ドルまで落ち込んでおり、2010年も102.9億ドルと伸び悩んでいる⁴³。私が帰国する直前の2009年6月にはこれまで見られなかったクルグズ人による日本人相手のノックアウト強盗が白昼数軒起こっている。「衣食足りて礼節を知る」というが、この頃の街中の治安は悪くなる一方であった。

図1：労働者送金と雇用者報酬（受取金額米ドル）とGDPに対する割合（対GDP比％）

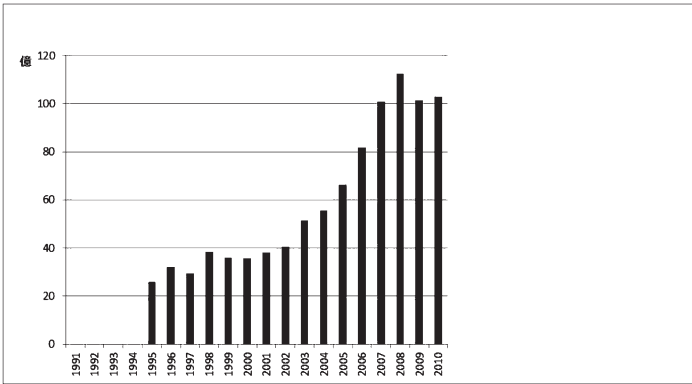


＜世界銀行の統計資料に基づき筆者作成＞

42 世界銀行の統計より

43 世界銀行の統計より

図 2：家計最終消費支出（億 \$）



<世界銀行の統計資料に基づき筆者作成>

＜ナルンを取り巻く内部環境＞

次に、内部環境という点において、クルグズスタンとくにナルンの気象が四月政変にもたらした影響を考察してみる。ナルンの気象観測機器は、緯度：41.43° N / 経度：76.0° E、高度に 2039(m) の地点が設けられている。今回は気象庁のデータを元に月間の平均気温と月間降水量を見てみることにする。

まずは、下表を見て分かるとおり、2010 年冬季（2009 年 10 月～2010 年 3 月）の気温が平年値と比べてそれほど低かったというわけではない。ただ、人は気温をまだ身体の中に残っている前年の体感気温と比べる性質があるので、2009 年の 12 月の平均気温を見る限り、6 度も低く、寒いという印象を持ったのかも知れない。ただ、2010 年 1 月の気温は前年よりも 6.5 度高く、また平年よりも高い。2010 年 2 月以降は前年と大きな差は無く、平年並みである。よって、「2010 年の冬がとくに寒かったから電気料金の値上げに反対した」というロジックは通用しなさそうである。

表 3：ナルンの気象変動①月間平均気温

月平均	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
平年値	-14.8	-11	-1.7	7.5	11.8	14.8	17.4	17.8	13.1	6.2	-2.6	-11.8
2008 年	-18.5	-14.5	1.8	8.1	15.5	17.4	18.3	19.2	14	6.2	-2.7	-6.3
2009 年	-17	-10.5	-0.5	7.5	11.1	13.7	15.9	16.3	12.3	6.6	-2	-12.3
2010 年	-11.5	-10.3	-2.6	7.5	11.3	14.4	17.1	17.9	12.3	6.3	0	-11.3

<気象庁のデータに基づいて筆者作成>

次に下表にある降水量（冬期は降雪量）を見てみる。クルグズ人は、雪が降り、積もると寒いという印象をもつからである。2010 年冬季（2009 年 10 月～2010 年 3 月）の降雪量であるが、2010 年 1～3 月は前年の同時期の値並びに平年値と比べても格段に降水量（降雪量）が多い。降水量（降雪量）の少なかった前年 2009 年と比べるとの 5 倍以上である。この平年以上、前年よりも格段に多い降水量（降雪量）が人々に寒い冬という印象を与え、電気料金の値上げに強く反対したと言えそうである。

表 4：ナルンの気象変動②月間降水量（降雪量）

降水量	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
平年値	9.8	12.1	25.6	33.1	47.7	52.9	38.5	25.1	13.7	19.1	16.1	13
2008 年	9	10	30	8	32	30	42	13	6	23	19	22
2009 年	4	6	7	62	75	64	67	48	50	17	20	14
2010 年	25	36	47	20	51	53	32	25	7	52	5	9

<気象庁のデータに基づいて筆者作成>

次に農業の収穫という観点から気温と降水量見ると、夏場の気温の高さと前年冬の降水量（とくに降雪量）が大きな意味を持ってくる。なぜなら、前年冬に山々に堆積した雪が春から秋にかけて少しずつ水を供給し、春から秋にかけての気温（とくに夏の気温）が農作物の成長を促すからである。この観点から前述した二つの表を考察すると、まず 2009 年 4 月から同年 9 月にかけての気温は、平年よりも 1 度前後低く、前年よりも 3 ～ 4 度低かったことが分かる。冷夏である。また、山々に冠雪が始まる 2008 年 9 月から 2009 年 3 月にかけての降水量（降雪量）の合計は、平年値が 109.4mm であるのに対して、87mm と平年よりも少ない。ただ、2008 年 4 月から 8 月にかけての降水量（降雪量）の合計は、平年値が 197.3mm であるのに対して、316mm と格段に多い。しかし、雨の降り方にもよるが、316mm の雨が毎日少しずつ降るわけではなく、まとまって降るため、農地に継続的に水を供給するためには、雪として堆積した降雪量が大きな意味を持ってくる。また、

笠井 2009 によると、2008 年は「降雪量の少なさが水不足として表面化し、農業に直接の影響を与え、水を巡っての紛争が国内で多発した」⁴⁴ としている。2009 年のナルンの農作物の収量は、「2008 年よりは良かったが平年以下に留まった」⁴⁵ とのこと。これは、2008 年の干ばつにより土地が固くなってしまっていたことが原因だとされている。ただ、世界銀行の統計によると、2009 年の穀物の収穫は 2008 年を大幅に上回り、生産性も向上している。このあたりの統計と実際の齟齬は今後検証していく必要があろう。

＜まとめ＞

いずれにせよ、上述したようなナルンを取り巻く外部環境、内部環境がナルンの一部の市民を革命の一翼を担う行動へと導いたことは確かである。ここで、日本の歴史を振り返ると、二・二六事件において、同じような状況が見られる。気象学者である松嶋は、松嶋 2011 において、「日本を第二次世界大戦に突き進ませた端緒ともいわれている二・二六事件。この背景に農村の疲弊があり、東北地方で発生した冷害がそれを深刻化させた」⁴⁶ としている。また、青年将校は「兵の家庭の貧窮や村の飢饉を知るに及んで」⁴⁷ 行動を起こしたと解説している。この青年将校という言葉をクルグズスタンの農村の若者に置き換えると、農村の貧困という状況を打開するために立ち上がることに對する自己正当化の根拠になるのではなかろうか。もちろん、上述したとおり、春先に職を求めて街に出てきた貧困層の若者にとっては「政治集会は収入の少ない貧困家庭や仕事のない若者にとっては生活費を稼ぐ貴重な機会」⁴⁸ であることが言えよう。

5. おわりに ～四月政変は市民革命と呼べるのか、残された課題

5-1. 四月政変は革命と呼べるのか

これまでクルグズスタンにおける二つの革命を比較しながら、四月政変が起こった端緒について、ナルンでの出来事を中心として、当時の政権による圧政により自由な報道が十分になされなかった点の解明に務めてきた。クルグズスタンでは憲法の第二章において、国民の自由を謳っていながらも、実際には報道規制を行ない、国民の知る権利を制限してきた。こうしたメディアへの圧力は、反政府勢力を抑制する上で、強権政治の常套手段である。こうした報道規制を掻い潜って、4 月 7 日の四月政変へと革命のムーブメントを盛り上げていったのは、野党政治家のリーダーシップによるところが大きいのであろうか。それとも、動員された民衆の行動力によるものなのであろうか。本節では、四月政変が市民革命と呼べるのかどうかを検討して締めくくりたい。

まず、チューリップ革命について、宇山・前田・藤森 2006 は「政権交代を「民主化革命」として賞賛するつもりはない」「単に少数の政治家による権力篡奪や、外国の陰謀による政変だったとして事件を矮小化する立

44 笠井達彦（2009 年）、P2

45 イブラエフ・ナルン水道局長へのヒアリングによる。

46 松嶋憲昭（2011 年）、P128

47 松嶋憲昭（2011 年）、P128

48 浜野道博（2011 年）、P50-51

場も取らない」⁴⁹としている。2010年の四月政変は、現地では一般的に「революция（革命）」と呼ばれているが、「実際は革命ではない」という意識を持った人も多い。それでは、四月政変とはなんだったのか。

市民革命とは、「革命の結果、政治による社会に対する支配方法が『人』から『法』に変わる事」である。絶対王政や植民地下にあった政権に対する革命の例として、三大市民革命がある。名誉革命（1688-1689年）、アメリカ独立革命（1778年）、フランス革命（1789年）の三つである。宇山・前田・藤森 2006 は、チューリップ革命は「前政権と新政権の間に多かれ少なかれ連続性が見られ、社会構造の根本的な変化も、大規模な暴力も伴っていない（中略）クルグズスタンの政権交代は革命とは到底呼べない」⁵⁰と述べているように、実際にはバキエフと彼の親族、さらに彼の取り巻きらによる『人』の支配が続いたため、市民革命とは言えないであろう。しかし、四月政変を見れば、オトンバエヴァは自らの大統領権限を大幅に内閣に移し、議会制民主主義を導いたという点において、『法』の支配を推し進めたことを勘案すれば、市民革命と言えるのではなかろうか。

次に考えなければならないことは、革命に動員された（参加した）民衆がクルグズスタン国民全体の革命を望む意思を体現しているのかどうかという点である。この点については、四月政変直後に革命の正当性を国民に問うために6月27日に憲法改正の信を問う国民投票を実施し、「クルグズスタン全土で七十パーセントを超える投票率、九十パーセントを超える支持で憲法改正が支持され、オトンバエヴァ大統領の信任も得られた」⁵¹ということで、結果的には大多数の国民の意思を反映した革命として位置づけられることとなったと言えよう。

宇山 2006 では、「2005年にクルグズスタンで起きた議会選挙を契機とする反対運動における大衆動員メカニズムに着目して、市場経済化が旧来の社会的紐帯を崩壊させ、新しい社会ネットワークが出現している」とし、「クルグズスタンの政治は政治家の原則なしの離合集散が最大の特徴であるとし、南北の地域対立や部族主義については懐疑的である」としている。確かに、1991年の独立以降、吉田 2004 が言及した「親族ネットワーク」が社会の相互扶助的な役割を果たしてきた。その過程において、オトウズ・ウールとイチキリクから派生するクルグズ民族の部族意識は影を潜め、今では田舎で年寄りが選挙などの際に同じ部族出身だからという理由で候補者に投票するといった具合でしか残っていない。現在社会を動かしている人々は、50歳代は旧ソヴィエト時代の教育を受け、共産党幹部として要職に付き、一定の財を成したエリートである。ナルン行政府における主要なポストは、彼らがコネとカネでたらい回しにしている。この状況は四月政変後も変わっていない。

ただ、筆者がfacebookなどのSNSを通じて知る30歳前後の次世代のリーダーはもっぱらアメリカやヨーロッパで教育を受けたりベラルな考えを持った行動的な人物である。現在クルグズスタンの人口構成は20歳前後の層が一番厚い。昨年の大統領選挙の時に早稲田で政治学を勉強する30代前半のカチキンバエフとの話の中で、私が「マドマロフは政治家としてのカリスマ性があるのではないか」と水を向けたところ、「彼は一世代前の政治家で、もはや旬ではない」と一蹴したことが印象深い。こうした世代がリーダーとなる頃にはクルグズ社会の民主化は格段に進んでいると思われる。

5-2. 残された課題

残された課題としては、スワナリエフへの取材ができず、中国への土地租借における真相を確認できなかったことである。また、四月政変へと民衆を動員した要因について、動員された（参加した）個人をモチベーション理論から分析し、動員したリーダーをリーダーシップ論から分析しようと考えていたが、手がまわらな

49 宇山・前田・藤森（2006年）、P84

50 宇山・前田・藤森（2006年）、P85

51 浜野（2011年）、P33-34

かったことである。政策を考える際、政策の立案・施行過程、政策が社会に与えた影響などを現象として捉えることも重要だが、政策の影響を直接受ける人々の政策に対する意識や行動に目を向けることも重要だと考えたからだ。こうしたことは今後の課題として、機会を作って分析を行ないたい。

＜現地語表記について＞

本文の用語は、引用部分も含めて、下記の通り統一して表記した。但し、参考文献・参考論文の名称は除く。

キルギス	→	クルグズ
キルギスタン	→	クルグズスタン
ビシュケク	→	ビシケク
オシュ	→	オシ
バキーエフ	→	バキエフ
アカーエフ	→	アカエフ
イスラーム	→	イスラム
ソビエト	→	ソヴィエト

＜参考文献・参考論文＞

浜野道博『キルギス政変 ～天山小国の挑戦』東洋書店、2011 年

中西健『中央アジア・クルグズスタン～旧ソ連新独立国家の建設と国民統合』明石書店、2011 年

堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』ミネルヴァ書房、2010 年

宇山智彦「クルグズスタン（キルギス）の再チャレンジ革命：民主化・暴力・外圧」2010 年 4 月 18 日

若林直樹『ネットワーク組織～社会ネットワーク論からの新たな組織像』有斐閣、2009 年

笠井達彦「経済移行政策の実現の難しさ～キルギスタン勤務終了と EBRD 勤務開始にあたり」比較経済体制研究（第 15 号）、2009 年

田中浩『新版 国家と個人～市民革命から現代まで～』岩波書店、2008 年

宇山智彦・前田弘毅・藤森信吉「グルジア・ウクライナ・クルグズスタン三国の「革命」の比較」『「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 第 16 集』北海道大学スラブ研究センター、2006 年

宇山智彦「クルグズスタン（キルギス）の革命－エリートの離合集散と社会ネットワークの動員」『「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 第 16 集』北海道大学スラブ研究センター、2006 年

吉田世津子『中央アジア農村の親族ネットワーク』風響社、2004 年

宇山智彦『中央アジアの歴史と現在』東洋書店、2000 年

森泉達士（日本国際問題研究所主任研究員）「キルギスタンの民族問題と領土・国境問題 ～小国の独立維持と安全保障の模索」、1994 年

松嶋憲昭『桶狭間は晴れ、のち豪雨でしょう～天気と日本史』メディアファクトリー新書 038、2011 年

“В Кыргызстане чиновники Нарынской области недовольны действиями своего губернатора и просят власти страны дать разъяснения”, 24.kg, 04/02/10 16:30 Бишкек-ИА

“В Кыргызстане губернатор Нарынской области опровергает информацию о том, что он вывел за штат весь аппарат своей администрации”, 24.kg, 05/02/10 8:36 Бишкек-ИА

Ruddy Doom 2005 “Poverty and agriculture in post-soviet Kyrgyzstan”

Ж. Жэналиева “Биринчи каналы Видео” (6’21”), 11-Фев-2010 , 13-Фев-2010

以上